

朝日新聞社のオリジナル副教材「ペタッとSDGs新聞学習ふせん」を使ったワークショップ。我孫子市の市立我孫子第一小学校



身近なSDGs 手賀沼から学ぶ

我孫子市立我孫子第一小学校で11月27日、新聞社の幅広い仕事を知り、SDGs（持続可能な開発目標）を地元の手賀沼との関連で考えるワークショップが開かれた。10月に実施した「手賀沼SDGs授業」の第2弾。今回はキャリア教育の一環と位置づけ、授業の組み立てを変えた。

朝日新聞社の社員3人が講師を務め、5年生3学級（約90人）で2コマ続けて実施した。1時間目はまず、「職種のデパート」と呼ばれる新聞社の仕事を動画を視聴しながら学んだ。記者、撮影者、校閲、編集者、デザイナー、印刷、パイロット……。朝日新聞社に航空部があり、ヘリコプターや飛行機を保

我孫子一小本社社員が授業

有していることを知った児童は驚きの様子を浮かべた。プロ野球再編や政権交代、海外の取材経験を話した講師もいた。その後、「誰一人置き去りにしない」というSDGsの理念と17のゴール（目標）を学習した。

児童はこれまで手賀沼の環境や水質、干拓の歴史を学んできた。2時間目は、それらの学習の積み重ねをSDGsに結びつけた。11月22日付朝日小学生新聞を手に取り、1面記事「深海の底に大量のマイクロプラスチック 房総半島の沖500*」がSDGsの各ゴー

ルと、どう関係しているかを考察。朝日新聞社のオリジナル副教材「ペタッとSDGs新聞学習ふせん」を使い、意見を書いて発表した。

その上で、プラスチックごみが手賀沼の環境に影響していることを復習し、手賀沼とSDGsの関係について大切に思うことを「ふせん」に書き、意見を出し合った。山口一花さんは「記者の仕事が分かった。記者以外の多くの人が新聞社で働いていることも知ることができた」。種田篤友さんは「朝日新聞と朝日小学生新聞で同じニュースを読み比べたいと思った」。木原大貴さんは「SDGsの意味を深く考えることができた。手賀沼の環境がSDGsとつながっていることが理解できた」。

(橋田正城)

新聞や「ふせん」教材に 環境問題を意見交換

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。